

寄付文化の礎は チャレンジャーを応援しあう社会

特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会代表理事
寄付月間推進委員・共同事務局長

鵜尾 雅隆 氏



未来へ
贈ろう

「寄付月間」 Giving December は、全国各地で寄付に関わる活動を行う30余りの団体（日本フィランソロピー協会も参加）が推進委員会を結成して、運営を進めている。寄付月間の旗振り役であり共同事務局長の、特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会代表理事の鵜尾雅隆氏に話を聞いた。

「寄付月間」を始めたのはどのようなきっかけだったのでしょうか？

鵜尾 2009年に日本ファンドレイジング協会を発足した当初から、「ボランティア週間」（1月）のように「寄付月間」をつくるうとの意見は出ていました。でも漠然と、まだタイミングではないと感じていました。その後も議論が出たり消えたりでしたが、昨年「東日本大震災で寄付した人は76%強」という統計が出て、寄付のキャンペーンをやったらどうかと、企業や国際機関などからもご提案がありました。温度感が出始めているなと思い、実現に至りました。寄付は取り組むプレーヤーが

多いので、みんなで時間をかけて仕組みをつくるうと、各方面にお声かけしながら形にしていきました。

「手ごたえはありますか？」

鵜尾 おかげさまで、まったく予想していなかった動きも出てきています。寄付月間のキックオフイベントには、当時内閣府大臣政務官で寄付推進担当だった小泉進次郎さんが、盛り上げ役を買って参加してくださったり、めったにお受けにならない新聞取材に応じてくださったり。ビル・ゲイツさんとのコラボも実現します。彼は「Giving Tuesday」(www.givingtuesday.org)にも協力されていますが、縁あって、2015年12月に社会貢献をテーマとした対話イベントを一緒にできることになりました。

なんの予算も形もなく始めた寄付月間ですが、皆さんがいるいるな形に乗っけてくださっています。愛知を中心に、「カンパイヤリティキャンペーン」を実施する参加店舗も約1000にもなっており、楽しみながら気軽に参加できる企画も

あります。

「欲しい未来をつくる」というキャッチコピーは、共同事務局で長い時間議論して決めたそうですね。鵜尾さんが欲しい未来とは？

鵜尾 私のですか？（笑）「応援しあう社会」です。寄付が進む社会とは、お金が流れる社会というより、チャレンジャーを自然と応援する社会です。誰かが社会のために何かからチャレンジしているときに、自然に応援しようとなる、応援された側もまた誰かを応援する。がんばってれば、どこかで誰かが応援してくれていると、子どもたちが信じられる社会です。「助け合い」とはちょっと違うイメージです。

「課題先進国」日本は、もう明らかに、行政だけでは課題を解決できない時代に入りました。さまざまなプレーヤーが立ち上がって活躍することが不可欠ですが、彼らを応援する人たちが自然に存在している社会になるといいなと思っています。

現状のNPOセクターは、まだまだ

だ「応援してもらおう社会」で、それをどう「応援しあう社会」に持っていくか、そこが難しいですね。

鵜尾 応援しあう社会とは、「NPOの応援をする／応援されたNPOがあります。まずは何か起こしたい変化があつて、支援者、実施者（インプリメンター）、受益者それぞれの思いと役割、何らかのゴールイメージがあるなかで、その夢を一緒に実現する、応援しあう形です。まさに、一人ひとりに「あなたの欲しい未来とは？」と、この機会に聞きたいですね。

— お金がないと、自分や組織の存続・発展が「欲しい未来」になりがちで、そこが難しいところですね。

鵜尾 NPOは民間非営利組織には、1・0、2・0、3・0があると思うんです。1・0は、自分たちの組織や事業を確実にマネジメントして、想定されている自分たちのソリューションをきちんと受益者に提供する。しっかりとやりましよう

という段階。創業者、経営者、理事会が戦略を考えて、その枠組みのなかで協力者となつていく。あくまでインベシヨンの主体は主催NPOです。2・0は、支援してもらおう関係性でも、その過程で大勢の人が、いろいろなきづきや自分の役割を見つけていく。自分たちで課題を解決する1・0のステージが半分、残り半分は枠外の人たちが参加し、受益者や社会の理解を広める段階。

この仕事を7年やってきて実感するのは、NPOに3・0があるということです。3・0は、その場でできた人間関係、共感性のネットワークが、想定していなかった新しいインベシヨンをどんどん勝手に起こしていく。誘発的インベシヨンの段階です。これこそが、民間非営利セクターの持つものすごく大きな価値。単に、関わってもらつて理解が広まったというだけではなく、その人自身が新しいインベーターになつて、社会の最適解をみながらどんどん見つけていく。どこにだれがいるかもわからない「つわあつ」という感じが、NPOのここからの可能性だと思います。

— 欲しい未来を感じる幸せな実感ですね。

鵜尾 日本ファンドレイジング協会には支部を設置する「地域チャプター制度」があるのですが、チャプターの人たちが、どんどん新しくおもしろいことをやり始めてくれて、ほんとうに想定外です。当初のチャプター規約では「あれはやっちゃダメ、これはダメ」とたくさん連ねていたのですが、5ヶ条に変えてしまいました。「第2条 チャプターのみながやりたい!と思うことをやる」(笑)。変えてみたら、やはりおもしろくなつてきて、そういうことなんだと思えました。行政ではできず、企業も単体ではなかなかできないのが誘発的インベシヨんです。

— 想定外のこと起きてても、またそれに乗っていく。

鵜尾 今、「社会のために何かしたい」と思う空気が生まれてきていると思います。日本は、一人ひとりの実体験で、ものの方で変わる

社会です。ある事柄が正しいとか、哲学的にどうだというより、個々人がほんとうに腑に落ちる実体験が必要なのです。だから寄付月間も、一人でも多く実体験を伴つて寄付というものを前向きに考えるきっかけになればと思います。

— 普通の人に運動を広げていく方法は?

鵜尾 「2…6…2」とよくいわれます。社会のなかで変化を起こすことに前向きな人が2割、どちらでもいい人が6割、ネガティブな人が2割。これを応用すると、寄付月間にも、社会に何らかの影響力を与える人が2割と2割いる。1つ目の2割は著名人やスポーツアスリートなど影響力のある人のグループ。もう1つの2割は、一見影響力がなさそうだけれど実はある「子ども」だと私は考えています。これだけ少子高齢社会になると、子どもたちによいことかどうかが重要なテーマですから。この4割に訴えていくことが、広げることにつながるのではないかと思っています。

うお・まさたか

JICA、外務省、米国NPOなどを経て、2008年NPO向け戦略コンサルティング企業：株式会社ファンドレックス創業。2009年、寄付10兆円時代の実現をめざし日本ファンドレイジング協会を創設、2012年から現職。認定ファンドレイザー資格創設、アジア最大のファンドレイジングの祭典「ファンドレイジング日本」開催、『寄付白書』発行など、寄付や社会的投資の促進に取り組む。G8社会インパクト投資タスクフォース日本諮問委員会副委員長、社会的投資促進フォーラムメンバー、日本ボランティアコーディネーター協会副代表理事、株式会社ファンドレックス代表取締役。

「寄付月間～Giving December～」とは

NPO、大学、企業、行政などで寄付に関わる主な関係者が幅広く集い、寄付が人々の幸せを生み出す社会をつくるために、12月1日から31日の間、協働で行う全国的なキャンペーン。
主催：寄付月間推進委員会。 <http://giving12.jp/>



著名人グループでは、スポーツで社会貢献するアスリートの取り組みを強化したいです。憧れのアスリートが寄付や社会貢献をしてくれら

世の中の空気もだいぶ変わると思いますが。ルーキーの新人研修で、ユニークな社会貢献事例やマッチングギフトの仕組みを学んでもらったりできないかなと考えています。文科省でも、スポーツ庁発足に際して地域でスポーツチャリティのモデル事業ができないかという話もしました。元プロ野球選手の古田敦也さんにもいろいろとアイデアをいただいています。経営者やリーダーたちの社会貢献クラブをつくる話もあります。

— どんどん人を巻き込んでいく力があります。人を信じるのが原動力となっているように感じますが。

鶴尾 皆さんのおかげです。組織を超えて、日本各地のNPOや公益法人、企業の社会貢献担当の皆さんと活動に取り組みせていただいているので、自分には同僚が30万人いるように思えて心強いです。寄付月間も皆さんお忙しいなか、気持ちよくご

協力いただいています。資料を自主的に英語に翻訳してくださった方もいます。

寄付月間は幅広い人を巻き込む仕掛け、社会のいるいるな人が乗れる枠組みにしたいですね。関心のある人はまだまだたくさんいるという直感があります。今は人の陰に隠れてじっとしているけれど、チャンスがあったら踊ってもいいと思っっている人の視線を感じるんですよ(笑)

— 人の行動パターンを変えるのは難しいけれど、ポジティブに、地道にですね。

鶴尾 寄付月間で人の行動パターンがどれだけ変わるのかと聞かれます。やってみただけで、どれだけ変わったかわからないという結果になるかもしれない。でも、8年前、起業に際して考えたことを思い出します。「とどのつまり、このチャレンジは、日本人を信じるかどうかだ」と。寄付が進む社会、応援しあう社会は、自分だけではなく1億2000万人にとっていい社会だという確信がありました。あとは

「それでも社会は変わらない」と思っ
て挑戦しないのか、「やれば変わる」
と日本人を信じる一生を歩むのか。
やはり、信じてアクションしてい
きたいです。

前職で世界の約50カ国の社会構造を
実際に見て回ったなかで、日本に
欠けているのは「インフラ」「仕
組み」「仕掛け」だ気がつきまし
た。あることによって促進剤にな
るのに、まだなされていないことが
20個ほど見えました。この20個が
あれば日本は変わりはじめるとか
寄付月間、スポーツチャリティ、
子どもの寄付教育、遺贈寄付…、
2020年までに20個全部やっ
てみようと思っています。

— 寄付文化醸成、「寄付月間
（Giving December）」の定着に
向けて、がんばりましょう。本日は
お忙しいなか、ありがとうございました。

インタビュー

公益社団法人日本フィランソピー協会
理事長 高橋陽子

【2015年11月11日 日本ファンド
レイジング協会にて】